

当院の各診療科の専門医をはじめとする医療スタッフが患者さまや市民のみなさまに、診療内容や最新の情報をお伝えすることを目的として、市民医療講座を毎年5～6回程度開催しています。

今回は、昨年9月1日(土曜日)に開催しました小児科の講座「子どものおなかのなか～栄養のことから病気のことまで～」の様子をご紹介します。

当日は、あいにくの天気でしたが、約30名のかたに参加いただきました。当院小児科の長谷川医師から、食べたときの各臓器の動きについて、子どもだけでなく、大人の栄養バランスのこと、子どもの成長や子どもの便秘、治療法についての説明がありました。参加者からは、「子どもが『おなかのなか』とよくいうので、おなかの中のこと、知らないこと、アドバイスなどを聞くことができよかった」と好評の声をいただきました。

ご参加いただきましたみなさま、ありがとうございました。

なお、今年2月には、消化器内科の講座も予定しています。詳細は市広報紙及び当院ホームページをご覧ください。



お知らせ

新しい病院事業管理者が就任しました



本市の病院事業を経営する職である重松 剛 前病院事業管理者が昨年10月31日付けで退任し、11月1日付けで稲野 公一 病院事業管理者が就任しました。

【稲野病院事業管理者より】

「担うべき医療を チーム一体となって より安全に」の理念のもと、市民の皆様や健康を守る最大のセーフティネットとして、今後も職員一丸となって取り組んでまいります。

また、船場東1丁目へ2024年度前半に移転できるよう、将来の医療需要をしっかりと見極めながら、最新医療に的確に対応でき、かつ効率的で機能的な新市立病院を整備してまいります。

病院機能評価の更新認定を受けました

このたび、当院は、公益財団法人日本医療機能評価機構(以下「機構」)による病院機能評価の4回目の認定を受けました。

病院機能評価は、機構が、病院の質改善活動を支援する目的で審査をするもので、認定された病院は、地域に根ざし、安全・安心、信頼と納得の得られる医療サービスを提供すべく、日常的に努力している病院と言えます。

当院は、各審査項目で高い評価を受けました。特に、「地域の医療機関と適切に連携していること」及び「感染防止対策が適切であること」について、最高ランクのS評価をいただきました。

引き続き、安全で質の高い医療サービスの提供に努め、皆さまに信頼される病院として、地域医療の充実に貢献してまいります。



こちらも、ご覧ください！リアルタイムな情報が満載！ 箕面市立病院HP



箕面市立病院だより

2019.1 Vol.33



<https://minoh-hp.jp>

編集発行：箕面市立病院 事務局病院経営室 ☎072-728-2001(内線2718)

ダビンチを使った直腸がん手術が 保険適用になりました

本年1月に厚生労働省が発表した、2016年に新たに診断されたがん(全国がん登録)は995,132例(男性566,575例、女性428,499例)で、がんの種類別では男女をあわせて、大腸、胃、肺、乳房、前立腺の順に多くなっています。

「大腸」は、肛門に近い「直腸」とそれ以外の「結腸」の2つに分けられます。このうち「直腸」にできるがんについては、昨年の4月から手術の選択肢が広がりました。詳しくは次ページ以降でご紹介します。

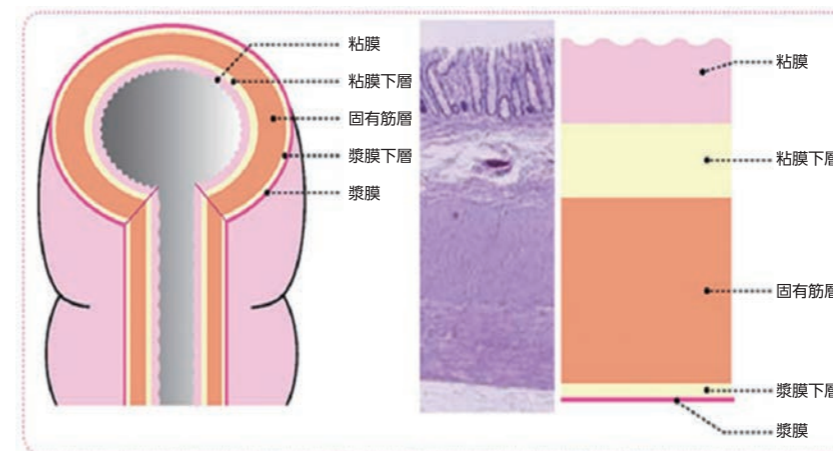
大腸がんは増えている!?

かつては日本人には少ないといわれた大腸がんですが、食生活の欧米化にともない年々増加しています。大腸がんになりやすい年齢は50歳から75歳、男女比は1.6:1で、男性に多く発症すると言われています。

大腸がんの発生原因はまだわかっていませんが、高脂肪、高蛋白かつ低繊維の食事が強く関係していることが明らかになっています。

大腸がんの症状としては、血便、下痢・便秘などの便通異常、腹痛、腹部膨満、貧血などです。この中で起こりやすいのは血便ですが、痔(ぢ)による出血と間違いやすいので注意が必要です。「おかしいな」と思ったら早めにお近くの医療機関を受診してください。

また、血便といっても目に見えない血便、いわゆる「便潜血」も多いため、市町村で行われるがん検診を受けることも重要です。



患者さんのための大腸癌治療ガイドライン 2014年版(大腸癌研究会・金原出版)より

大腸は、5つの層からできていて、がんは最も内側の層である「粘膜」から発生します。

「粘膜下層」まで達したがんを「早期がん」といいますが、その「早期がん」の一部を除いて、発生したがんの基本の治療方法は手術となります。

では、次ページから、大腸がんの手術方法についてご紹介します。

大腸がんの手術方法としては、「開腹手術」や「腹腔鏡下手術」があります。また、腹腔鏡下手術にはロボットを介して行う手術「da Vinci(ダビンチ)手術」という選択肢もあります。このうち「腹腔鏡下手術」と「ダビンチ手術」についてご説明します。

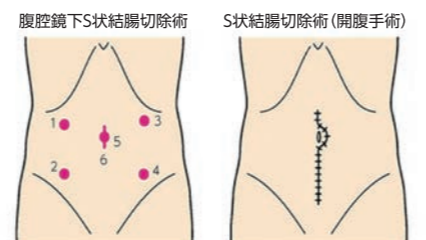
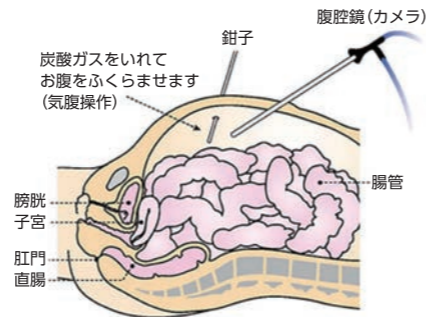
腹腔鏡下（ふくくうきょうか）手術とは？

かつては腹部にできたがんの手術では、お腹を大きく切る必要がありました。しかし近年では、前ページで説明した5つの層のうちの「固有筋層」から外側の層まで達している「進行がん」であっても、腹腔鏡下手術が行われるようになりました。右図のように腹腔鏡というカメラを使い、小さな傷口からお腹の中へ鉗子(かんし)という器具を入れて行う手術を「腹腔鏡下手術」または「腹腔鏡補助手術」といいます。

腹腔鏡下手術の利点は、傷口が小さいため、痛みや出血が少なく回復が早いことです。入院期間も開腹手術と比べ短くて済みます。

また、カメラで拡大して見るため、狭い骨盤内でも良好な視野を保つことができ、経験を積んだ医師が担当すれば、開腹手術と安全性に差はないと言われています。

ただし、お腹の手術をした経験があり、お腹の中の癒着(ゆちゃく)が強い場合には、腹腔鏡下手術を行えない場合もあります。



1~4:鉗子ポート ※施設によりポート(穴)の位置は多少異なります
5:カメラポート
6:腸を取り出す創
患者さんのための大腸癌治療ガイドライン 2014年版 (大腸癌研究会・金原出版)より

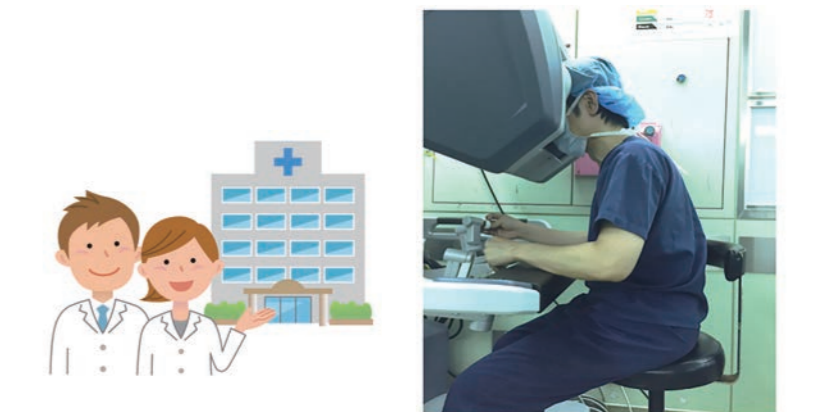
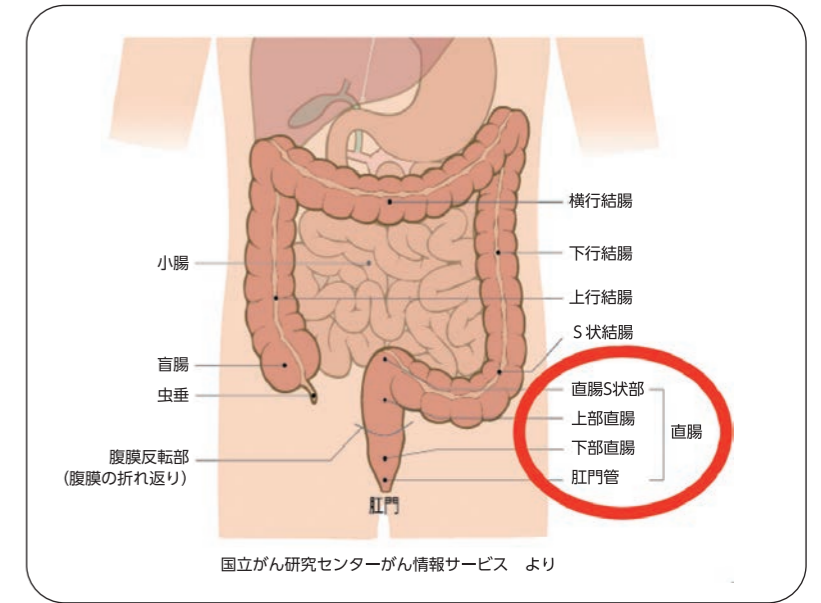
直腸がんのダビンチ手術は保険適用です

ダビンチ手術で、医療保険の適用となるのは、これまで前立腺がんと腎がんのみでしたが、昨年の4月から、胃がんや子宮体がんなど10種類の疾病まで拡大されました。**大腸がんのうちでは直腸(右図)のがんに対するダビンチ手術が保険適用となりました。**

これまでの直腸がんに対する腹腔鏡下手術の欠点を補い、精密な手術ができるとして期待されています。特に骨盤内の神経損傷を防ぎ、術後の合併症である排尿障害や性機能障害を最小限にとどめることが可能になると言われています。また、直腸周囲の膜を傷つけずに、膜にくるんだ状態でがん組織を摘出することで、がんの根治性を高められる可能性もあります。

なお、安全性確保のため、ダビンチ手術ができる医療機関や術者は制限されています。当院外科には、ダビンチでの直腸がん手術を術者及び助手として他院で50例以上経験した医師が在籍しています。

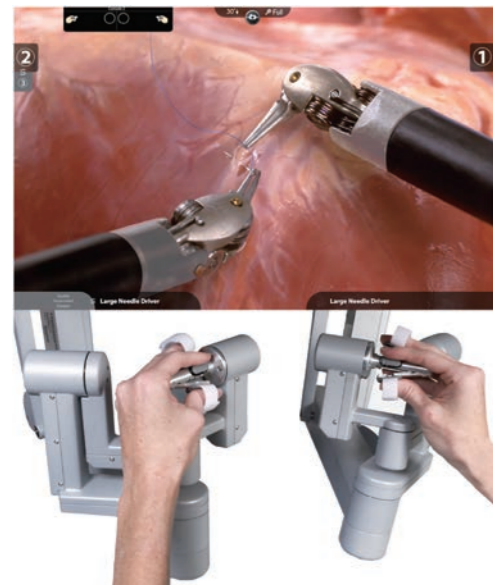
また、当院でのダビンチ手術は保険診療となりますので、**通常**の腹腔鏡下手術と同じ費用で受けることができます。



ダビンチ手術中の医師

da Vinci (ダビンチ) 手術とは？

通常の腹腔鏡下手術では医師が直接器具を操作して手術を行いますが、「da Vinci(ダビンチ)」によるロボット支援下手術では、器具の操作はロボットのアームで行います。しかし、アームを動かすのは執刀医で、ロボットが手術をするわけではありません。執刀医は「サージョンコンソール」という操作装置に座り、カメラの映像を見ながら、4本のロボットのアームを遠隔操作します。



通常の腹腔鏡下手術の画像は二次元が主流ですが、「ダビンチ」では、独立した両目のカメラで撮影される自然な3D(三次元)画像で立体画像を見ることができます。また通常の腹腔鏡下手術では、器具の先は開閉するだけですが、「ダビンチ」では器具の先が人間の手首以上に自在に曲がるので、可動域が広く、腹腔鏡下手術では不可能だった「手」のような動きが再現できます。

つまり、従来の腹腔鏡下手術に比べて、奥行きを読み取って、より正確な手術をすることが可能になりました。

市立病院では安心できる手術を行っています

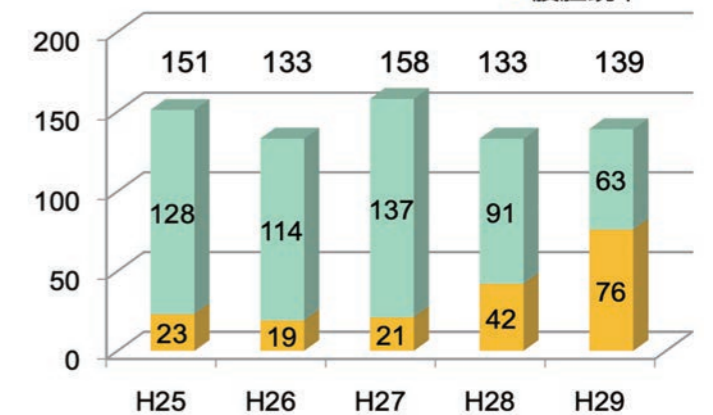
当院外科には、「日本内視鏡外科学会技術認定医※」が2名在籍し、腹腔鏡下手術やダビンチ手術を行う上で安全な体制を整えています。

また、当院での大腸がんの手術件数は、平成29年度(2017年度)139件、うち腹腔鏡下手術は76件で、前年度に比べて34件増加しました。

当院では、これからも開腹手術だけでなく、安全で体に優しい手術をめざし腹腔鏡下手術に積極的に取り組み、患者さまが安心できる手術を行っています。

※「日本内視鏡外科学会技術認定医」とは、内視鏡手術を安全かつ適切に施行する技術を有し、かつ指導するに足る技量を有しているとして認定された医師です。

当院での大腸がん手術



直腸がんを含む、大腸がんが疑われる場合は、紹介状をお持ちのうえ、ぜひ当院を受診ください。